

027
474
1

古今圖書集成




~~~~~  
~~~~~

~~~~~

庚申 春 芳名

芳名久保を縁とて一冊をたんとす縁の  
中にも名は縁之種一とて是に名を以てゆふ  
波の志は安筆の許は業乃阿久也とて  
ふゆとて名をたかむとて名をたかむとて  
許はふとて名をたかむとて名をたかむとて  
~~~~~ 於て名をたかむとて名をたかむとて  
~~~~~ 於て名をたかむとて名をたかむとて  
~~~~~ 於て名をたかむとて名をたかむとて


始無辭布行安於久其如偏不遊之
 素不久之社其弟其久其如偏不遊之
 亦如素一中之於其弟其久其如偏不遊之
 於其弟其久其如偏不遊之
 何其弟其久其如偏不遊之
 其弟其久其如偏不遊之



あらしはあらし

二三子と在る華明乃持し

りし事故けしめす

妻の良本のおくく久ゆく哉

亭

暖かなやまの翁乃ち

犬左

長きややうなつてつれと

苦水

ゆくの渡城人清くあつり

野丹

月正にふく新れ花前よ

漢水

あやりと作乃ちまじり

可董

行秋は筆の向くはあや

魯竹

本多は桐蔭乃倍るま

桃江

あま城ささ乃秋鬼くち

壺丸

崎と依りあつてさうり

亭

生るはあまさくく秋押わ

左

秋はあの方子 モリウ 観るは

芦

さ枯の月ふ城布を歩

丹

李花の事あけれや

水

水つけき橋くま髪のおつかり
 襦袢あつちもさくすあれ
 ちよ桜を乃とれ花さくり
 万葉さくしれ真の夕元

丸 江 竹 董

とくしりつらてけらさ
 ちよあ

陰坐道歌

善れま

ふりうしな水け降りり葉のま
 葉のをひりりし枝かくさりり
 けくのま降りりさくちつりり
 葉のまふ降りりけはのゆき
 冬角しき積もあきてまのま
 上京の地りまふあつち乃ま

駟丹 芹水 亭 可董 五原 漢水

妻のつとら子連しは人のり
手巾のつとら成不くみはのを
あしし物つとら喜成雲
おどりの笑ふあしはのさ

蛙

そととくおとら蛙の啼きを
しつ入くおありけらと啼蛙
しつ蛙とつき方とら二つ

桃江

魯竹

壺丸

式左

五原

菟江

壺丸

外水をと踏はきと啼蛙の如
草れ水のきれはきと啼蛙
くやとてきと啼蛙の如
蛙と並のくはきと啼蛙の如
きぬとてきと啼蛙の如
所川のきはらと啼蛙の如
蛙啼とてあけらと啼蛙の如

魯竹

可董

渠水

亭

芥水

駢丹

一無卷

早もてんくく丸

あはけしとて

捨りてうまは娘のり

まぢと人のつとを御まを

晴人の宮士をよけ秋幸儲

梓娘や初の花乃葉けし

あふ屋を乃人ま禮あつた

二りて代さるち品の上

まへりおちりましそ同

陸奥

東節

秋夫

春蟻

午心

浪平

奇調

初巻

丘高

千載堂

丈士

朝もやうくしをまより

浪平

八千坊

正月まふ終り無も

不二

まじおつ

あはけしとて

ゆきれてしとて

一七

聴雨

爽なまぬ

信濃

希言

梅もあつて

三ノ十

周泉

俯向ま

馬印

園花をめぐりてのふたなりとてまじりて
瓜坊 池田

梅をくまひりしちれをるるを
官父 一七

梅の花梅のまはまこゆを
楚雀 一七

くめを考りてはまのふをくまひ
親思 上州

白をくまひりし梅乃れ乱れりし
瑞馬 浪華

秋より梅の月影し成りしを
東尾 伊丹

而れ梅白の成りしを
月居

いそがしきくししし

さくら

白男や老てきりしを
五明 扶田

あうをやきまわしりしを
芥水

白男は白きよのれを
亭 伊達

白男は白きよのれを
左鐵

白男は白きよのれを
丈左

さくら

春のさくらを
士朗 三六

十二八

くつきのまのま掃や神ハきももあへ

長齋

湖南

雨くまみ袖く清くゆき乃空

騏道

相れ雲拂くもまられいとほひ

桃江

十二八

くくあふ降纏せりゆきの雪

大江丸

まら

あつたふねは

あつたふねは

東都

まらまらあつたふねは

完來

伊達

あつたふねは

竹冠

まらまらあつたふねは

柳花

信濃

あつたふねは

梅廬

八上

あつたふねは

五芳

あつたふねは

蓮和

あつたふねは

蒼虬

草房は

伊勢

あつたふねは

豆在

甲斐

あつたふねは

曇眠

戸たさ家等々人のよ成帝

八千里

将之として学々しく御方

岩城

予々の乃む

祐昌

うまのす子記々々

玄珠菴

青芳押方にて

多量何事かす

樗堂

ゆかたさく

成美

ゆき乃々々

文蘿

きくくくきくく

陸奥 南陽

第其也や

敦賀 亮驥

あそや

鹿奥 真石

あつひり

あつひり

あつひり

二八 自樂

あつひり

壺丸

あつひりの

甲斐

可都里

えり宿下りるる海のそら

貞士

あはれとて月と潮台と夕を夜

井六

長閑とれそよよつりそよそよ

魯座

曙乃海とておきて燕のひかり

武陵

爽の如も暮る紅ぬの空の色

見車

雲のうらみとて暮るる空の如

井眉

暁乃二日又よ東は戸らりゆ

美和彦

暁のそよひ妻持し成りゆ

東部

あはれ

あはれ

あはれ

暁只よれ甲斐代守めくれ

可董

徒ほ旅乃袖跡まゝに旅性哉

微風

あはれ

雪とけや所々実こそせや所々

重尊

つんぽりしや性ゆかりまの若

蒼山

霧への野をりちるるかや

下方

月久すてあくるきりきほりく 上毛 霞竜

きりく成配見り松あつり 林亭

陸人乃社たきき 一魚

筑前はく終乃下り 羅月

此松のやそれむ 東都 雙鳥

吾乃社れ明るあきれ水の 鹿古

ききとれそちけき 其成

くく森あけり神 五原

路をゆ イセ 竹丸

多し松の怪しねぬ 土蓬

妻の月夜き 拍水

ちけは 乃

つ 乃

影鶴れめきて 陸奥 露秀

たの 律太

萩の月我懐 下総 月船

猿渡乃肩子猿さく時可也

武八王寺

星布
先女

初宮九子あササ降くし此年久經

換之

樹く乃白の時向と海でかりるん

伯先

手は善友きりりしくおりつく

葵堂

水取乃舟くわく海やくく乃や

北聖

修やするふさう夕暮れをばらん

改弄

秋乃静の懐を吸く入りくふ

祇來

夕暮やつりもれ西夕町のゆる

一茶

そ北村や埃拂りくく少杯 布舟

高砂

よりのとまふりりきり色成
あま〜〜〜
やん〜〜〜
〜〜〜

あま又れまを思はむれ歌成 駝丹

むし我とほくさ中を水乃水 可董

花子画ふきり鈴りれあ埃り 糸ほる

や水乃水くくやほく〜 蓮叶 芳水



竹翁之畫
 予嘗聞此畫之名久矣
 今始得觀之其筆墨之妙
 不可言喻也
 予嘗聞此畫之名久矣
 今始得觀之其筆墨之妙
 不可言喻也
 予嘗聞此畫之名久矣
 今始得觀之其筆墨之妙
 不可言喻也

一無菴

題塵窪

信
中
而
古

混沌初開。覆載乃成焉。西曜布明。萬類流
 形。於是乎海陸界別。中州蠻夷。各安其所
 分。此之謂人間。人間之外。別有一州。山舒
 水清。春有花。秋有月。凡嗜聽此土者。其心
 則玄元南華。其言則淳于東方。衣塵充錦。
 家窪比宮。長也少也。無為而化。幾與穴居

之世似矣。目號曰塵窪。余已生人間。偶得
遊其都。乃歎曰。鳴仙境不他。無何有之鄉
邪。華昏之國邪。將吾塵窪之都也。

寬政十有二載。唐申季孟春。採筆於嘉會室。

平安

鼎齋

亨

戲誌



蕉門俳諧書林

京三条通寺町西五入

菊舍太兵衛

